# 華麗なる宴の場 ～〈黒書院〉一の間・二の間～

後水尾天皇（1596-1680）が徳川幕府の招きに応じ、寛永3年（1626）9月6日から5日間にわたって二条城を訪れた「寛永行幸」は、二条城がもっとも華やいだ時間でした。本年度は、行幸から400年を記念し、行幸時に使用された二の丸御殿の部屋の障壁画を展示します。行幸の行事は、二の丸庭園の南側に設けられた行幸御殿を中心に行われましたが、二の丸御殿も、行幸に出仕した公家や門跡らの饗応の場として、また、〈大広間〉の南に設置された舞台で上演された能の観覧席として使用されました。

今回の展示では、公家の饗応の場となった〈黒書院〉から、一の間の一部と二の間の障壁画を紹介します。

## 画題と技法が示す「場」の序列

行幸に先立ち、幕府は二条城を大改修します。この時、大御所徳川秀忠（1579-1632）が使用する本丸御殿と、天皇が滞在する行幸御殿を新築し、既存の御殿を改修して将軍徳川家光（1604-51）が使う二の丸御殿としました。これらの御殿には、狩野探幽（1602-74）率いる狩野派の絵師達が障壁画を描きます。後世に狩野永納（1631-97）が編纂した『本朝画史』（1678年刊）は、障壁画の画題と技法、それを描く場の関係について、序列の高い順に、水墨による山水図、淡彩による人物図、濃彩による花鳥図を描くことが多いと記します。本丸御殿と二の丸御殿の障壁画は、御殿の奥から順に、水墨で山水、濃彩で花鳥を描いており、『本朝画史』の語る画題と場の序列に一致します。

二の丸御殿の奥から二番目と三番目にあたる〈黒書院〉と〈大広間〉は、いずれも将軍との対面所を備え、障壁画は濃彩で花鳥を描きますが、その描き方は異なります。〈大広間〉は、床から天井までの壁面を一続きに使い、巨大な松や孔雀等を描くのに対し、今回紹介する〈黒書院〉の対面所（一の間・二の間）は、長押の下に《桜花雉子図》を、長押の上や付書院の腰障子等に水墨淡彩で《楼閣山水図》を描きます。加えて、桜の花弁や垣根の盛り上げ胡粉（胡粉を塗り重ねて形を立体的に表現する技法）や、金雲の周囲の切箔や砂子等、手の込んだ技法は、〈大広間〉の障壁画には見ることのできない特徴です。花鳥を、画題の序列の最高位にある山水と組み合わせると共に、手の込んだ技法を惜しみなく使うことで、〈黒書院〉対面所は、〈大広間〉対面所よりも高い序列にある空間だと示されています。

## 公家の饗応と〈黒書院〉の機能

寛永行幸二日目は、行幸御殿で、家光から、天皇と、自らの妹であり中宮（天皇の后）となっていた和子（1607-78）、女院（天皇の母）である中和門院（1575-1630）、そして二人の姫宮へ、白銀や反物、麝香等、豪華な進物が献上されました。その後、天皇、中宮、女院、大御所、将軍だけでなく、公家達も含めて舞楽を観覧し、終演後、観覧者に膳が振る舞われました。この時、二の丸御殿〈黒書院〉は、公家達の饗宴の場となり、二の間には宮家や摂家、朝廷の要職者たちの席が、三の間には諸大夫と諸門跡の、四の間と東廊下（牡丹の間）には、公卿や殿上人の席が、それぞれ設けられました。

〈黒書院〉二の間に座したのは全員で14名。そこには八条宮智仁親王（1579-1629）、伏見宮貞清親王（1596-1654）と彼らの若宮、そして高松宮好仁親王（1603-1638）といった宮家の当主たちに加え、関白の近衛信尋（1599-1649）、太閤の鷹司信房（1565-1658）、右大臣の一条昭良（1605-1672）、内大臣の二条康道（1607-1666）といった朝廷の要職者たちが席を並べました。さらに、幕府と朝廷の関係を繋いだ前関白の九条幸家（1586-1665）とその息子で右近衛大将の九条道房（1609-47）等も列席しています。現天皇の叔父や兄弟、そして関白や太閤、大臣など、朝廷において天皇に次ぐ立場にある人々が、席を連ねたのです。将軍家との関係という点では、鷹司信房は、その娘、孝子（1602-74）が家光の正室であり、九条幸家は、その妻、完子（1592-1658）が家光と異父姉という間柄というように、彼らの中には将軍と姻戚関係にある者もいました。ここに幕府と朝廷との密接な繋がりをうかがうことができます。

この饗宴では、幕府側の大名や旗本らが彼らを接遇し、美麗を尽くした金銀製の食器を用いる等、豪華な御膳が供されたと伝わります。切箔や砂子が蒔かれた春の景色と山水に囲まれた華やかな空間で、幕府は、朝廷の要人たちをもてなしたのでした。寛永行幸という一大政治イベントにおいて、〈黒書院〉一の間・二の間が果たした役割は、朝廷と幕府を結びつける「華麗なる宴の場」を創出することにあったといえます。

行幸後、寛永11年（1634）に将軍家光が上洛した際、〈黒書院〉では、行幸時と同じく摂家、親王、大臣のほか、門跡、勅使、院使、中宮使等、やはり朝廷内で高位にある公家達との対面が行われたのに加え、九条幸家の子で公卿の松殿道昭（1615-46）や、熊本藩主、細川忠利（1586-1641）等、行幸時に入室した人とは異なる立場の人物とも対面をしていますが、〈黒書院〉は、幕府にとって重要な人物との交流の舞台としての役割を果たし続けました。

寛永行幸から400年の時を経て守り継がれた障壁画の美しさを体感するとともに、かつて繰り広げられた華やかな宴の情景を、ぜひ思い描いてみてください。

元離宮二条城事務所学芸員　中野 志保